

潮見櫓の復元工事こぼれ話

破風板の原寸図▶

櫓復元の工事を行うためには、設計図が必要になります。紙の図面では表現が難しい屋根の反りなどは、右写真のように原寸大の図を板に書いて工事の参考にします。古建築の工事ではこのような原寸大の図面を作成することが多いそうです。



「福岡みんなの城基金」へご協力ください！

福岡市では、潮見櫓など福岡城の歴史的建造物（櫓・門等）の復元整備を主な目的とした寄附金を募集しています。

寄附金は「ふるさと納税」として扱われ、住民税や所得税の控除が受けられるほか、市外居住者には金額に応じて福岡の返礼品を進呈しています。

【問い合わせ先】 史跡整備活用課 (TEL 092-711-4784 FAX 092-733-5537)



表紙の写真 潮見櫓完成イメージ

復元される潮見櫓の形は、二層櫓の南側（画像の右側）と東側に1層の付櫓をもつことが特徴的です。復元に欠かせなかったのは、残っている柱や梁の部材の地道な調査でした。部材の長さや加工の痕跡を一つ一つ確認し、元の柱の構造をパズルのように復元する作業を行い、調査結果に基づいて設計図を作成しました。表紙のイメージは設計図をもとに作成したものです。建物の外観は、現在残っている福岡城の櫓や門と古写真をもとに復元しています。

また、福岡城の建物の特徴として、屋根の^{ひさし}庇を支えるために「^{ほおづえ}頬杖」と呼ばれる部材を屋根の下に斜めに立てることや、外壁の上半分を漆喰で塗り、下半分を板張りにすることが挙げられます。上記の調査結果に加えて、このような特徴も参考にしてイメージ図を作りました。

編集・発行 / 福岡市経済観光文化局文化財活用部

〒810-8620 福岡市中央区天神1-8-1 / TEL : 092-711-4666

福岡市の文化財HP : <https://bunkazai.city.fukuoka.lg.jp/>



福岡市の文化財



fukuoka_bunkazai



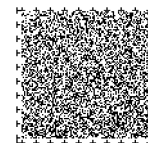
SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

潮見櫓完成イメージ



特集

復元進む福岡城潮見櫓



音声コードのご利用には、Uni-Voiceのダウンロードが必要です。

特集



復元進む 福岡城 潮見櫓

福岡城の潮見櫓は、明治時代以降、数奇な運命をたどってきました。今回は、福岡の歴史を語る上で欠かせない福岡城の歴史について、そして現在進められている潮見櫓の復元工事についてご紹介します。

福岡城は、慶長6年(1601)から7年の歳月をかけて黒田官兵衛・長政親子が築城した城です。かつては47の櫓があったと伝えられ、九州屈指の規模を誇る名城でした。

潮見櫓は城の最も北西の隅に建てられ、城下町から間近に見える建物として、当時の人たちにも馴染み深い建物でした。

明治時代以降、城の建物はほとんどが壊されたり城外に移築されたりしました。潮見櫓もそのうちの一つです。明治40年(1907)に黒田家の菩提寺だった博多区千代の崇福寺から払い下げ願いが提出され、崇福寺の仏殿として移築されました。しかしなぜか潮見櫓の名前が正しく伝わらず、長い間「月見櫓」と間違っ

一方、下之橋御門の横には、移築復元された別の櫓が「潮見櫓」として伝えられてきました。平成3年(1991)に、崇福寺に移築された櫓を調査したところ、建物の屋根裏から棟札(建物の工事の由緒を書いた木の札)が発見され、そこに「潮見櫓」と書かれていたことから、こちらの建物が本物の潮見櫓であったことが明らかになりました。下之橋御門の横にある櫓は、現在、(伝)潮見櫓と呼ばれています。



もっと知りたい!



福岡城についてもっと詳しく知りたい方のために、市内の図書館などで閲覧できる資料をご紹介します。

◇『特別編 福岡城 築城から現代まで』福岡市史編集委員会2010

潮見櫓の復元に向けて

平成26年(2014)、大濠公園と舞鶴公園の一体的な活用を図り、市民の憩いの場、歴史、芸術文化、観光の発信拠点を作ろうという「セントラルパーク構想」が策定され、さまざまな整備が行われています。近世福岡の中心であり、現代に至る「都市」福岡の基礎を形成した福岡城も整備が進められており、潮見櫓の復元もそのひとつです。



▲櫓の2階部分。これから屋根板を張ります。

潮見櫓は、崇福寺に移築された際、一部改変されたと考えられています。そのため、福岡城の頃の柱や梁の一部が失われ、また長年の間に劣化した部材もあります。今回の工事では江戸時代からの部材をできるだけ使っています。建物全体の約4割の部材が古い部材です。



▲1階の梁。白い新しい部材の間に古い部材が見えます。

今回紹介した潮見櫓は、福岡城跡のシンボルの一つとなる復元建物として様々な検討を行い、歴史に忠実な再現をめざしています。工事ではできるだけ昔と同じ素材を使い、瓦1枚釘1本まで伝統的な工法にこだわっています。完成は令和7年(2025)春の予定です。